

常照

第787号

供養諸仏と成仏道

最近お葬儀をおつとめしていると考えることがあります。それは私たちがどんな生き方をしても、立派に生きても情けなく生きても、最後に辿り着くのは火葬場の釜だということです。そして、行き先が決まっている中で、どう生きたら良いかを教えてくださるのが仏教であります。

仏教では、私たちは六道を経巡って生

きていると教えています。六道とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天です。

地獄は争いによつて孤独に落ちて行く世界。餓鬼は欲望に支配された生き方です。畜生はいろんな理屈をつけて自分の始末をつけていけない生き方。修羅というのは「自分が正しい」と言つて、義を立てて争う生き方です。人間道は苦あり楽ありの世界で、唯一仏様の教えが聞ける世界だと言われています。そして天人道は楽しみを貧り続ける世界です。

そして天人道の一番上を他化自在天と言います。「他を化する」とあるように、この世界は他人を喜ばせることが自分の喜びであるという世界です。立派ですよ。ね。ともすると仏様と似ているようで、

常 照

よくわからなくなる境界です。

しかし仏教はこの他化自在天も迷いである
と教えます。それはなぜかというところ、
結局喜びたいのは自分で、相手を利用して
自分が喜んでる世界だからです。もう一つ、
他化自在天が究極ではないといふのは、
喜ばせる相手を失った時の苦しみがある
からでしょう。その苦しみは地獄の十六倍
であると教えられます。

ですから六道の中でどれだけ向上しても
人間の幸せはないのです。そこでお釈迦様は、
この六道をどのように超えていくかという
ことについて、二つの教えを残されました。

一つは法華經ほけきょうに代表される出家の
仏教です。そこには、六道の上に声聞界・縁

覺界がくかい・菩薩界ぼさつかい・仏界ぶつかいがあると説かれます。

声聞しょうもんというのはお釈迦様の教えを聞くこと。
縁覺えんかくというの縁起の法に目覚める
ということ。菩薩ぼさつというの、その
教えを自分だけでなく、他の人にも伝えよう
としていくことです。そうやって階段を上
がるように修行を積んで仏に成っていく道
です。しかしこれは修行ができる者のため
に説かれた教えであります。

もう一つは浄土三部經じょうどさんぶきょうに説かれる在家の
仏教です。在家というの生活者、働いて収入
を得ていくということです。「子供がいる者
は子供を育てなさい。仕事がある者はしつ
かり仕事をしなさい。唯一、生きてる間、
仏様の教えを聞き続けなさい」という
教えであり、命終わった者

は必ず仏様に成るといふ教えであります。

一般的に成仏という、何か良い所に行つて、生きてゐる我々に悪さをしない者になることだと思われてゐるように感じます。しかしどこか良い所で寝転んで、みんなから忘れられていくことを成仏とは言いません。残つた者たちをいつまでも教育し続けるのです。

御和讃に「安樂浄土にいたるひと 五濁悪世にかえりては 釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし」とあります。これは、亡くなつていった方はお釈迦様と同じ仕事をする。つまり利他行を果たすということです。その仏様の教育を聞いていくということをお供養と言います。

供養という言葉の語源は「プージャナ」というインドの言葉であります。これは「見返りを求めずに尊敬する」という意味です。それと似た意味のインドの言葉で「ヤジュニヤ」という言葉があります。こちらは「尊敬することを通して見返りを求める」という意味になります。今、一般的に言われている供養は「ヤジュニヤ」ではないですか。しかし、お釈迦様は「プージャナ」と「ヤジュニヤ」を一緒にしてはならないと教えています。ですから供養というと、亡くなつた方に何かを施すとか、手を合わせてお願い事をするとかいう感覚がありますが、それは違ふのですね。

供養諸仏というのは、「いくら私たちの

頭で考えた頂点に上り詰めてもそこには
 幸せはないぞ。人生を全うできるものに
 ならなければ『こんなはずではなかった』
 と言つて、恨みと欲求不満とだけで終わ
 つていかなきゃならんぞ」と亡くなつて
 いった仏様が教えてくださることを聞き
 続けていくことです。そしてその教えを
 聞いて、「これでよかつた」と自分の人生
 を全うしていける者になることを成仏道
 というのです。



八月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 八月七日(水)～十一日(日)

安芸教区 沼田組 法隆寺

講師 森 岡 恵 隆 師

○後期 八月十三日(火)～十六日(金)

大阪教区 島中南組 明教寺

講師 葭 田 誓 子 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
 して頂きます。

どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院
 くださいますよう、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四四番
 FAX 二九一四〇八〇番
 テレホン法話 二七一六一六番